

## 実践6 「発見が溢れている豊かな環境って？」

**概要** 子どもたちが、全身で泥水に関わったり、植物の生長に驚いたりなど瑞々しい感性を發揮している姿に注目した実践です。保育者が日頃から「保育を語り合う」文化により、子どもの実像を的確に捉えて保育の工夫につなげています。

**ポイント** 子どもと保育者との間に生まれる心の動きや、子どもたちが発見したことに目を向けた環境作りは、子どもたちの経験の豊かさにつながっています。子どもたちの姿をありのまま受け止める保育者の関わりが、豊かな感性を育てています。子どもと保育者が共に育ち合う保育から「科学する心」の育ちが伝わってきます。

### 京都市楽只保育所

2歳児

#### 本園が考える「科学する心」が芽生える土壌づくりの仮説

- ① 発見が溢れている豊かな環境。
- ② 共感してくれる仲間がいる。
- ③ 子どもの気づき(科学する心の芽)をキャッチし、共感し、感動する感受性豊かな保育者の存在。
- ④ 子どもも大人も心から楽しめる保育実践があること。
- ⑤ 楽しさのおすそわけの大切さ(思わず事務所や休憩室で話したくなる)。

#### 「保育を語る会」

主体的に遊ぶ子どもの姿と保育実践を基に「保育を語ろう会」を職員で行い、乳幼児期における保育者の存在と役割について語り合ってきた。保育者同士が語る時間と場、そのものがまさに重要であり、この過程こそが楽しさが湧き上がる「保育の土壌」を作っていくことに欠かせないのだと思っている。

#### 事例1：“バチャーン”と“ピチャピチャ”(2歳児)

7月上旬。園庭のウォータースライダーで使っている流しっぱなしの水から大きな水たまりができた。水たまりを歩く子ども。泥水を容器に入れる子ども。泥水の中に寝そべる子ども。

Aさん「気持ちいい？」 Bさん「温かいなあ」

すると突然大きな音。丸太の飛び石からジャンプしたCくんの水しぶきの音だ。

Aさん「バチャーンっていった！」 「ほんまやなあ」とBさん。

「うわあ、びっくりしたなあ」と保育者。周りの子どもも次々に飛び込んだ。



2日後。保育者が菜園の支柱に水道ホースを結びつけ、雨のように水を出す。しばらくすると、水たまりができた。おもむろに走るDさん。同じ道を帰るようにまた走り、“走って戻る”を繰り返す。保育者が「何してるの？」と聞くと、Eさん「ピチャピチャ、いうねん」。その姿を見て、他の子どもたちも一緒に走り出した。「ピチャピチャ」することが分かって楽しんでいる子どももいれば、何で走っているのか分からずにとりあえず楽しそうに走っている子どももいる。



**【考察】** なんとも言えない泥の生ぬるさを肌で感じ、友達と共有していると捉える。こんな経験の積み重ねが、豊かな感性を育てていくのだと思う。また、音に対しての気づきが見られた。寝そべっていた時に突然聞こえた「バチャーン」の音。耳と水との近さから、水を伝って聞こえた音に驚いたと考える。水の音を発見しただけではなく、“飛び込んで音を出す”という行為で、音そのものを遊びに繋げて繰り返して飛んでいると考察。その経験があったからこそ、2日後の別場面で「ピチャピチャ」の音に気づいたのだろう。飛び込んだ時とはまた違う、自分の動きについてくる音。「ピチャピチャピチャ」と音を連れてくる感覚があったのでないだろうか。子どもたちにとっては何気ない遊びなのかもしれないが、しっかりと「科学する心」を感じていると感心した。乳児期に「遊びを通して違いを全身で感じて気づくこと」が、これから先に「科学する心」を培っていくための土台となっていくのだと考察する。

## 発見が溢れている豊かな環境を目指して～竹のトンネル～

乳児クラスの園庭。子どもたちの動線が、三輪車など動きのある遊びと、砂遊びなどの静かな遊びとの空間で交錯し、落ち着いて遊び込めないことが以前から課題であった。「隠れるような場所が少ないので、大きなトンネルが欲しい」と、担任の思い。限りある予算の中で、近所に生えている竹に注目「まずは作ってみて、あかんかったら修正しよう」と、ブルーシートや遮光ネットを被せてトンネルにすると、喜んで中に入る子どもたちだった。

しかし数日後、「丁度、目の高さに飛び出ている竹が危なくて」と話が出る。トンネル作りに携わった職員は、「子どもが一番側で遊んでいる担任の先生が気づいてくれるから有難い」と伝え、すぐに補修。言いにくいことを言える関係はとても大事だと感じた。子どもたちの姿から、もう少し変化が欲しいとなり、子どもが身近に感じられるのではと今年度の栽培計画にあった「スイカ」と「カボチャ」をこのトンネルで育てることになった。

同じツル性のキュウリやヒョウタンも育ててみたら、どうなるだろうか。年間の予定にはない作物ではあるが、何かに生かせるかもしれないという気持ちで栽培を始めた。6月初めには、様々なつるが竹を伝い、緑のトンネルとなった。



## 事例2：“ガジガジ”と“フワフワ”（2歳児）

5月初旬にツル性の植物を植えたことで、素敵なトンネルができ上がった。小さいカボチャやキュウリ、ヒョウタンの実ができると、三輪車を走らせながら、上にできた実を見上げていた子どもたち。緑のトンネルに入り、**ツルの間から見える実を見て、「なんやろな？」と友だち同士で言い合っていた。**「これなんなん？」と子どもたちが聞くので「これはカボチャ、これはキュウリ、これはヒョウタンやで！」と保育者が実を指しながら答えると「ふ～ん」と言って実を眺めていた。



6月初旬のある日、「カボチャ、大きくなったかな」と数人の子どもたちとトンネルのところまで見に行った保育者が、「カボチャ、大きくなったね」と言うと、Fさんが「**葉っぱも、大きくなったなあ**」と言う。見てみると、本当に子どもの顔より大きくなっていて、Fさんは**初めてカボチャの葉の大きさに驚いたようだ。「おおきなあ」とカボチャの葉を触る。**触ってから「ガジガジやな」と言うので、保育者も触ってみる。本当にガジガジでちょっと手が痛いくらいだった。その横にあるキュウリの葉っぱも触って、「**これもガジガジやな**」とFさん。葉の感触に意識が向いた姿に、ヒョウタンの葉は見た目には柔らかそうだったので「**こっちのヒョウタンはどうかな？**」と保育者が言うと、**Fさんは「確かめないと」という表情で触った。「こっちはフワフワやん！」**。保育者も触ってみた。Fさんが言う通り、気持ちがいいくらいにフワフワの柔らかさであった。Fさんの気づきに嬉しくなって、保育者はその場にいた所長に「聞いてください。Fさんがカボチャとキュウリの葉っぱの裏側を触って「ガジガジ」って言って、次にヒョウタンの葉っぱを触って「こっちはフワフワ」って言うんです。すごくないですか？」と伝えた。所長もすぐに葉の裏を触って、「ほんとか、Fさんの言う通りやねえ」と嬉しそうにFさんに話し、周りの子どもや先生たちに「Fさんがな…」とFさんの気づきを話していた。

**【考察】**トンネルという普段の遊びの場所に、栽培活動を持ってきた。畑ではなく、遊びの中であえて栽培したことで、子どもとの物理的な距離だけではなく、心理的な距離も近くなった。そして昨年度、思う存分草花を触って摘んできた子どもたち。そんな要因が重なって、子どもたちは葉の感触の違いを感じることができたのではないだろうか。「科学する心」の芽を育てるのに、「環境」と「子ども」の距離感」は非常に大切な要素ではないかと感じた。また、子どもの発見に気づき、実際に触って子どもが表現した言葉通りの感触に感動する保育者。「チクチク」でもない、「ザラザラ」でもない、「ガジガジ」。大人がカボチャの葉を触った時に、こんな言葉で表現するだろうか。まず、周りを納得させる表現力に感嘆した。

今まで育てたことのある野菜であるが、葉の感触を意識したことがなく、私たち大人は「見て、黄色い花が咲いているね」「小さな実ができたね」などと言葉掛けをして、野菜の成長の変化などを伝えようとしていたことに気がついた。勿論、変化に気がついて欲しくて、保育士から伝えていくことも大事であるが、子どもたちが感じることや見たままの感動をしっかりと受け止めることの大切さを改めて感じた。この出来事をきっかけにして、子どもたちに「葉っぱを触ってみる」という行動が広がり、色んな感触を確かめる姿があり、隣のクラスの子どもたちにも広がった。